

Title

手放すこと／受け取ること

藤井風の音楽における余白

Name

北村匡平

1 断ち切ること

音楽シーンを瞬く間に席卷した藤井風——。歌謡曲から R&B、ジャズ、ロック、クラシックまでカバーする幅広いジャンルの横断性、転調を組み込んだ複雑なコード進行にもかかわらず大衆性のあるポップなメロディを載せるセンス、ピッチに狂いのない卓越した歌唱力とリスナーを温かく包み込むような声質——挙げればキリがないほどこの岡山のミュージシャンが規格外の才能をもっていることがわかる。だが、こうした音楽的センスはもちろんのこと、歌詞においてもリスナーの心を強く揺さぶる、批評性のある言語感覚をもっている。これもまた藤井風が現代社会に求められている重要な要素であると思う。

藤井風の紡ぐ歌詞には独特の思想が見出される。ファーストアルバムに冠された「HELP EVER HURT NEVER」（常に助け、決して傷つけない）という言葉からもわかるように、人びとを「生きづらさ」から救済するような包摂力をもったリック。彼の放つ言葉は、新自由主義が跋扈し、これまで以上に優劣や勝ち負けで存在価値が規定されるような社会へのアンチテーゼであり、利他の思想にも通底する点が多分にあるように思われるのだ。

利他とは一般的に他者に「与えること」だとみなされている。利他といったとき、貧しい人たちに寄付をしたり、困っている人を助けたり、悩んでいる人のために自分を犠牲にして親身になって相談に乗ったり、さまざまなケースはあるにせよ、他人のために尽くすことだと想定されている。だが、この他人のためを思って「与える」という利他的な行為は、つねに「利己」に転じる契機をはらんでいる。本稿では藤井風がリリースした2枚のオリジナル・アルバム『HELP EVER HURT NEVER』（2020）と『LOVE ALL SERVE ALL』（2022）の楽曲を中心に、彼の音楽とリスナーを関係づける「余白」の在りようを探ってみたい。

藤井風の音楽の歌詞に登場する「ない」という否定の言辞が、消極的な意味で使われることはほとんどない。たとえば『特にない』は以下のように「ない」の思想が顕著に見られる。

特にない

望みなどない

わたし 期待せずに歩く

特にない
 願いなどない
 わたし 身を任してる

見返り
 求めるから
 いつも傷付いて終わる

ご褒美
 欲しがるから
 いつも腹が減ってる

望み／願いなどないと歌うことは一見、きわめて消極的な意味に思われる。後半は「ない」という言葉自体が使われているわけではないが、要するにここで歌われているのは「求めないこと」および「欲しがらないこと」である。欲望の向かう対象と自己の関係を断ち切ること。つまり「切断」が志向されている。人間は生きるうえで色々なものに囚われてしまう。際限なく何かを求めてしまう。固執するとキリがない。だから彼は〈欲望 しつこいのよ／消えたそばから現れないでよ〉と歌いつつ（『罪の香り』）、〈キリがないから／ここで終わらずだけなの〉と歌う（『キリがないから』）。何かに向かう欲望を意志的に断ち切るのだ。

彼の歌詞において、人間の執着や固執といった欲望からの解放のために選択されるのが「手放すこと」や「捨てること」である。実際、藤井風の楽曲の歌詞には「捨てる」や「手放す」というモチーフが頻出する。〈一つ一つ荷物 手放そう〉と歌う『帰ろう』や〈何もかも捨ててくよ〉と歌う『きらり』だけでなく、たとえば『もうええわ』の歌詞では〈もうええわ 自由になるわ／もうええわ 手放したいもの今全て この空に捨てて／もうええわ そう思うならサッサ手放して〉と歌われる。彼のなかで「手放す」という行為は、自暴自棄になったり何かを投げ出したりする消極的な身振りではない。では藤井風の歌詞における「手放す」という行為は何を意味するのか。

2 手放すこと

「欲望の三角形」という興味深い図式を提示したルネ・ジラルドによれば、欲望は具体的な対象からもたらされるものではなく、他者の欲望を模倣することによって作動する。それは限度がない欲望ゆえ、満たされることはない。これは実感としてよくわかる。だからこそ、絶え間ない欲望の連鎖から脱するために、何かを自分に取り込んでゆくのではなく、手放していく。

所有することをやめること——〈自分のモンなんてない〉（『調子にのっちゃって』）。「手放す」とは、所有していたものを人手に渡すことである。「足し算」ではなく「引き算」の発想。前者は欠落した空白を埋めるように何かを欲望するが、後者は引くことによって余白のスペースを生み出してゆく。『特にない』の後半の歌詞には、藤井風の思想の根幹に関わるような言説が見られる。

特にない
 定めなどない
 わたし 囚われずに歩く

特にない
 渴きなどない
 わたし 満たされてる

「定め」がないがゆえに囚われることもない。「渴き」がない（と認識するがゆえに）「満たされている」と感じられる。『まつり』では〈なかなか気づけんよね／何もかも既に持ってるのにね〉と歌い、『何なんw』では〈真実なんてもんはとっくのとうに／知っていることを知らないだけでしょ〉と歌う。あるいは『きらり』の〈新しい日々は探さずとも常にここに〉。欲求を満たすものを新たに取り込むのではなく、捨て去ることによってすでに「満たされている」と自覚すること——。ここには「手放す／捨てる」から「満たされる」という逆説がある。〈怖くはない 失うものなどない／最初から何も持ってない〉と歌う『帰ろう』は、こうした藤井風の思想が凝縮された楽曲だ。

ああ 全て忘れて帰ろう
 ああ 全て流して帰ろう

「帰ろう」は「還ろう」とも捉えうる死生観を歌った壮大な歌詞だが、「忘れること」や「流すこと」は、「手放す／捨てる」ことによって自らに「余白」を作る営みである。この曲はさらに次のように進む。

ああ 全て与えて帰ろう
 ああ 何も持たずに帰ろう
 与えられるものこそ 与えられたもの
 ありがとう、って胸をはろう

このような歌詞の世界観は、たとえば『旅路』の最後で歌われる以下のパートとも通底するように思われる。

あーあ
 これからまた色々な愛を受けとって
 あなたに返すだろう
 永遠の光のなか
 全てを愛すだろう

「手放す／捨てる」ことによって「与えられる／受け取る」スペースを作る。「与えること」ではなく「受け取ること」、言い換えれば他者に対する一方的な「贈与」ではなく、すでに「与えられている」ものを「返済」していくような営みである。私たちはすでに多くのものを受け取っている。そのことに「気づくこと」の重要性が彼の歌詞では何度も歌われているのだ。

3 受け取ること——フェイクと余白

多くのポップミュージックでは、何かを手に入れる欲望が見出され、いかに他者を愛するか——換言すれば「愛を与えること」——が歌われるが、藤井風の歌詞ではいかに「手放す／捨てる」かが歌われ、愛を受け取ること、強いて言えばすでに受け取っていること＝満たされていることが強調される。ここに彼の利他的な歌詞のエッセンスがある。

中島岳志は画期的な利他論の書物で、マルセル・モースの『贈与論』におけるポトラッチの例を示し、私たちは「与えること」が利他だと思い込んでいるが、それが時に「支配」や「統御」と結びついてしまうことを指摘した上で、利他が起動するのは「与えるとき」ではなく「受け取る時」だと論じている——「私たちは他者の行為や言葉を受け取ることで、相手を利他の主体に押し上げることができる」（中島，2021，p.129）。藤井風の歌詞の世界が独特なのは、歌い手の一人称が「与える」行為の主体ではなく、他者の行為の客体として規定し、「受け取り」によって他者を利他の主体へと位置づけるからではないか。

これまで藤井風の紡ぐ歌詞に見られる「余白」や利他的な特徴を見てきたが、こうした構造はリリックに限定されるものではない。たとえば彼の楽曲で頻繁に見られる歌唱表現が「フェイク」である。R&B系のシンガーによく使用されるフェイクとは原曲に変化をつけて即興で入れる「ah」「uh」「oh」などの歌唱表現のことで、彼の音源でもかなりの楽曲で記録されている。ライブパフォーマンスではさらに多様な表現が見られるが、藤井風の場合、フェイクは曲に彩りを与えるだけのただの「飾り」ではない。

『何なんw』や『まつり』や『damn』といったアップテンポの楽曲に添えられるフェイクは楽曲にグルーブを与えてリスナーを心地よくするが、とりわけ『特にない』や『“青春病”』、あるいは『やば。』などの楽曲におけるフェイクは、単なるテクニックを超え、聴取者にそれ以上の感情を喚起させる。そもそも音楽におけるフェイクは、言葉の意味が突如として消失する機能がある。藤井風自身もインタビューで「音楽的にここには言葉は乗らないなっていう時に♪ ah～に頼ることも多い」と語り、『特にない』のフェイクは「渴き」と「願い」と「祈り」が混ざったような感情で歌っているという（『MUSICA』2022年5月号）。言葉にしてしまうと複雑な感情の意味を縮減してしまう。だから複雑な感情を音だけでそのまま表現するというのである。

とはいえ言葉の意味を失った歌唱は、歌い手が意図したまま「正しく」リスナーに届けられるわけではないだろう。フェイクのパートに入ると歌詞の意味が消えることで一挙に「余白」が生まれ、リスナーがそれぞれの感情に即して意味を見出す「うつわ」のように機能する。いわば、〈意味〉は歌唱表現と聴取の間で相互的に生み出されるのだ。藤井風の音楽が多くのリスナーの情動を触発する要素の一つに、フェイク表現による「余白」の形成があるのではないだろうか。これは「手放す／捨てる」という歌詞の表現を、言葉の意味を「手放す／捨てる」フェイクの歌唱によって実践するようなものだといえる。また、これは別稿に譲るしかないが「余白」を作るという意味では、藤井風の音楽は時にメロディとして音を凝集させるのではなく、「引く」ことによってスペースを作ることがある（たとえば『何なんw』のラストのサビ〈それは「何なんw」〉の直後の「…」〉）。

フェイクは言語の意味を失うことによって言葉を超える。歌詞が消えることによってリスナーに新たな感情が生まれる媒介として機能する。いうなれば、聴取する者がそれぞれの仕方でも〈意味〉を見出すことができる鏡のようなものだ。そういう意味で、藤井風のフェイクは楽曲に感情の書き込みを許す「余白」を作り出す。歌詞や歌唱が連関して「余白」を感じさせる藤井風の音楽は、リスナーの感情を引き出して受け止めようとするのである。

参考文献

中島岳志 (2021) 『思いがけず利他』 ミシマ社
「藤井風」『MUSICA』(2022) 181号, 8-57.